

特別展 「日本絵本の世界」展 会期 平成19年4月20日(金)～5月20日(日)
 —その誕生から現代人気作家まで— 休館日 4月23日(日)、5月7日(日)、14日(日)

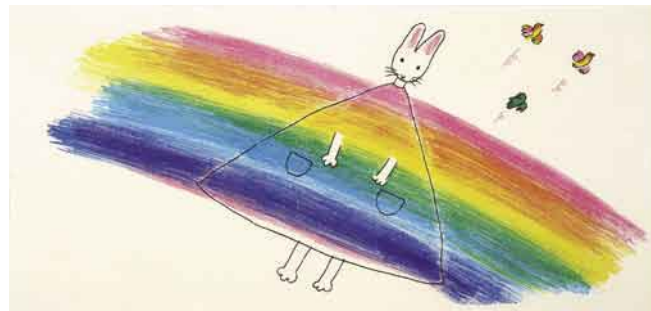
絵と物語が融合された芸術ともいえる「絵本」。明治時代に入ると実に数多くの絵本が出版され、子どもたちに愛されてきました。

日本の絵本のみならず、平安時代以来の絵巻物にあり、室町時代以降の奈良絵本・丹緑本、江戸時代の浮世草紙・仮名草紙などからさらに、赤本・草双紙へと受け継がれていきます。明治以降は欧米の児童文学も紹介され、表現方法や題材も多彩で複雑な様相を見せ、絵本芸術とも言えるべき世界が繰り広げられていきます。明治初期には、近世から脈々と引き継がれてきた多色木版本(日本昔噺シリーズ)、大正半ばには絵雑誌「コドモノクニ」、昭和に入ると「キンダーブック」、戦後の「岩波子どもの本」といったシリーズに代表されるように、バラエティーに富んだ絵本作品がつぎつぎと生まれていきました。

本展では日本の絵本の移り変わりを、明治・大正期の貴重な児童図書資料から現代の絵本まで約200冊と戦後の絵本原画約100点によって紹介します。郷愁の世界へと誘う絵本から現代の個性あふれる作家達のものまで、子どもたちの心をときめかせ、想像の世界を広げる絵本の世界を探ります。



コドモノクニ 本田庄太郎 画 1922



にしまきかやこ「わたしのワンピース」 1969

◀ 展示構成

- ▶ 明治の絵本 1868—1912
- ▶ 大正の絵本 1912—1926
- ▶ 絵雑誌の誕生
- ▶ 昭和の絵本 1926—1944
- ▶ 新たな模索 1945—1969
- ▶ ささまざまな開花 1970—1989
- ▶ 可能性をもとめて 1990—2006

◀ 関連事業

- ・記念講演会「江戸期昔話絵本の桃太郎—誕生の場面を中心に—」
日時：5月12日(土) 14:00～ / 講師：内ヶ崎有里子氏(岡崎女子短大助教授)
- ・参加体験型ワークショップ「江戸時代の絵本—赤本(桃太郎)を作ってみよう—」
日時：5月3日(木)、4日(金)(要申込) / 講師：木村八重子氏(元金城学院大学教授)
- ・作家によるワークショップ「お面をかぶって絵本から飛び出そう!」
日時：5月6日(日)(要申込) / 講師：スズキコージ氏
- ・「読み聞かせコーナー」および「昔の絵本・おもちゃを作ってあそぼうコーナー」
会期中 土曜・日曜・祝日に開催

◆ 特別企画「描かれた桃太郎」

「日本絵本の世界」展にあわせて、「桃太郎」を紹介する特別企画を組みました。桃太郎に関しては全国各地にさまざまな由来や伝説があります。なかでも岡山では桃太郎の桃、吉備団子、桃太郎の昔話の原型とされる「吉備津彦命の温羅退治」伝説の3つがそろうた最有力伝説地であり、早くから当地のシンボルとして愛されてきました。

本展では、「描かれた桃太郎」というテーマで、「桃太郎絵巻(本館蔵)」をはじめ江戸時代の版本・絵画作品に登場する桃太郎や現代作家による絵本の原画など多彩な作品群により「桃太郎」を紹介するものです。「講談社絵本 桃太郎」全原画30点初公開も大きな見どころ。時代や世相の変遷に伴い変化してきた桃太郎像、語り継がれてきた桃太郎伝説のあり様に迫り、その魅力の再発見の場となるでしょう。



「御囃桃太郎」菱川春宣 1890 公文教育研究会蔵

◆ おもな出品作品

- ・「桃太郎絵巻」狩野派 紙本着色 2巻 江戸時代(18世紀) 岡山県立美術館蔵
- ・「桃太郎絵巻」高崇漢 紙本着色 1巻 文化11年(1814) 高松市歴史資料館蔵
- ・「昔噺団」長沢声雪 紙本着色 1幅 江戸時代(18世紀)
- ・講談社絵本「桃太郎」原画 斎藤五百枝 絹本彩色30点 昭和12年(1937) 講談社蔵
- ・「昔噺きりがみ桃太郎」原画 安野光雅 平成8年(1996) 鳥根県津和野町立安野光雅美術館蔵



伝 三村陶景 「灰釉糸巻獅子香炉」 大正前期 本館蔵

- 平成19年 4月20日(金) ▶ 5月20日(日)…………… 日本絵本の世界展—その誕生から現代人気作家まで— <特別企画>「描かれた桃太郎」
- 6月 1日(金) ▶ 7月 1日(日)…………… 京都国立近代美術館所蔵 河井寛次郎展
- 7月24日(火) ▶ 8月26日(日)…………… ピカソ展 ルートヴィッヒ美術館コレクション
- 9月 5日(水) ▶ 9月16日(日)…………… 第58回岡山県美術展覧会
- 9月28日(金) ▶ 11月 6日(火)…………… 坂田一男展
- 11月15日(木) ▶ 12月 2日(日)…………… 第54回日本伝統工芸展岡山展
- 12月15日(土) ▶ 12月24日(月)…………… 第67回国際写真サロン入選作品展
- 平成20年 1月16日(水) ▶ 2月24日(日)…………… 人間国宝 荒川豊蔵
- 2月26日(火) ▶ 3月23日(日)…………… 特別陳列 表装の美

ただいま準備中! —坂田一男展— 前編

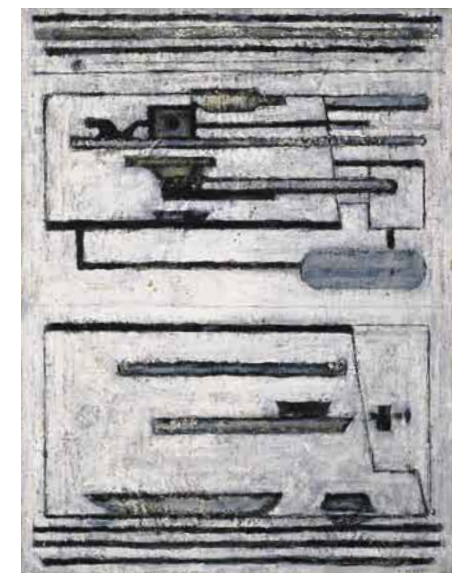
平成19年度展覧会の目玉の1つ「坂田一男展」の準備状況を担当学芸員に聞きました。

坂田一男展は1989年に生誕百年の際に倉敷市立美術館が行って以来なので、実に18年ぶりになります。今回は没後50年を経ての展覧会です。日本の抽象絵画の先駆者として知られる坂田一男ですが、識者の間では高く評価されていても、何しろ抽象絵画なので、一般的には? ? ?と受け止められやすいようです。

今は作品の所在調査と出品のお願いの最中です。作品はそれほど散らばっている訳ではなく、岡山県内に沢山あるのですが、所在を確認できていない作品もかなりあります。

文献調査の他、聞き取り調査もしていますが、坂田一男を知っていた方々も次々に亡くなられ、早めに手を打っておけばと悔やまれます。幸いI氏が主だった方々にインタビューされた貴重なテープを提供してくださったので感謝しています。

また、沢山の書簡が残されていて、これを文字起こしする作業も行っています。崩し字を読み取るのは慣れないと中々大変ですが、坂田の絵画についての考えや同時代の美術界に対する辛口の批評が述べられていて、大変興味深いものです。



坂田一男 (コンボジション)

● 編集後記

一年間、美術館ニュースの編集を担当しました。

季刊といえども、納品と同時に次号に取りかからなければなりません。次なるニュースの内容をその都度考え、締め切りまでに原稿を出してくれない同僚たちのお尻を叩き続けた一年でした。人のことばかり悪く言えません。展覧会担当の忙しさに挫けたり、校正作業を後輩に任せて留守にしたりと、なかなか細部まで配慮を行き届かせることができなかつた思い出もチラホラ…。

当館は2008年3月に開館20周年を迎えます。施設・設備リニューアルのための調査が、来る4月から始まります。この美術館ニュースについてもそれに合わせ、誰に何を伝えたいのかを明確にし、そのコンセプトに沿った企画とデザインを展開していきたいと考えております。(Y.T)

美術館ニュース 第76号
 発行：2007年3月 発行者：岡山県立美術館 〒700-0814 岡山市天神町8-48 TEL：086-225-4800
 URL http://www.pref.okayama.jp/seikatsu/kenbi/index.html E-Mail kenbi@pref.okayama.jp

ISSN 0916-9466

印刷割合率 100%再生紙を使用しています

伝三村陶景

MIMURA Toukei

「灰釉糸巻獅子香炉」

大正前期 本館蔵

目を見開き、四肢を踏ん張り、威嚇する獅子。引き締まった筋肉、渦巻くたてがみ、顔の表情から口の中の歯や舌まで、小さいながらも実に精巧に作られ、躍動感あふれる姿である。獅子の乗る糸巻は、均一な細い線で表現される。おそらく型物で備前の土に灰釉を掛けたと思われる。糸巻に獅子の組み合わせは、過去にも作例があり、本作品も備前の細工物の伝統を踏襲するが、

先例よりもはるかに丁寧な作りは高い技量を示す。作者とされる三村陶景（二八八五〜一九五六）は、明治末期から昭和初期にかけて、明治維新で疲弊した備前焼の復興に尽力した作家である。細工物をよくし、白備前、彩色備前、絵備前などに優品が残る。細工物から轆轤物へと転じ、後に備前焼で最初の人間国宝となった金重陶陽のライバルと目された作家である。（学芸員 福富幸）

こんにちは美術館

平成18年度の教育普及事業をふりかえる

今年度も様々な教育普及事業が開催されました。その中から「mite! おかやま」展に関するもの、「社会人のための美術の夕べ」「美術館講座」について各担当者がふりかえります。

今年度の当館普及事業の大きな出来事は、特別展「mite! おかやま」の開催と、展示会にあわせて、鑑賞体験ツアーとそのためのナビゲート研修を行ったことでした。「鑑賞の楽しさをみなさんに味わっていただきたい」というコンセプトを持つこの展示会は、鑑賞教育の第一線で活躍するアメリカ・アレナスにプロデュースを依頼し、作品選定から展示まで任せました。

展示会そのものが普及事業とも言えますが、その楽しさや意味を、より深く知っていただくため、アメリカ・アレナス本人によるフロアーレクチャー(7/21)、ギャラリートーク(7/22)や鑑賞体験ツアー(7/23~8/20)、小中学生鑑賞体験ツアー(7/23・30)、県美児童夏休み鑑賞教室(8/5・6)等を行いました。また、鑑賞体験ツアーを行うためのナビゲートスタッフ研修(5/14・29・30、6/18・20、7/19・20)や学校の先生方を対象にした研修(7/25・26、8/4)も実施しました。

展示会では、作者名や題名等を確認したり、作品の背景や作者の意図を理解しようとする鑑賞も見受けられますが、対話型鑑賞では、そういったことは横に置いておいて、作品に描かれていることをよく見て、見たことをもとに、思ったことや考えたことを話し合いながら、作品から受けた印象を確認していきます。ただそれだけなのですが、「こんなに長い時間作品を見たのは初めて」「初めて作品を鑑賞した気がする」といった声が多く聞かれ、鑑賞する側もナビゲートする側も、想像以上の楽しい一時を過ごしました。

また、7年目を迎えた「こんにちは美術館」においても、この対話型鑑賞やビジュアルシンキングの考え方を取り入れつつ、「作品のもつ様々な見方や価値観」に気づいてもらうことを念頭に置いてプログラムを実施しました。

今年度実施したプログラムは次のとおりです。

- ①「気持ちの擦りだすー気持ちを絵で伝えてみよう」(4/22)
- ② 美術館を知る「美術館探検」(6/10)
- ③ 美術を知る「スクラップ&ドリーム」(6/11)
- ④ 県立大学短期大学部生によるワークショップ「さがそう!じぶんいろ」(8/1)
- ⑤「作品に親しむ」(10/21・22)
- ⑥「和へのいざないー裂のはなしー」(11/11)

(学芸課主幹 廣畑浩)



特別展「mite! おかやま」アメリカ・アレナスによるギャラリートーク



③ 美術を知る「スクラップ&ドリーム」



④「さがそう!じぶんいろ」



⑤「作品に親しむ」

社会人のための美術の夕べ

平成18年度の教育普及事業をふりかえる

「美術の夕べ」は、平成18年4月からスタートしました。毎月1回、第4金曜日に、いったん閉館後の午後6時から約1時間美術館を開館し、学芸員が毎回違うテーマに沿って絵画等の説明をしています。

4月28日の「国吉康雄展をみる」を皮切りに、企画展開催中には、「浦上玉堂展をみる」(10月)、「伝統工芸展をみる」(11月)、「棟方志功と芹沢銈介をみる」(1月)などのテーマで、また、常設展のみの時は、「入門・岡山の美術」というシリーズで開催しています。この「夕べ」は、美術館や作品を身近に感じていただく体感型の鑑賞講座といった趣で、毎回20人前後の参加者があります。少ないときは10人程度のこともありましたが、40人を超えることもありました。参加者からは、「平日は仕事で、土日は家事などでなかなか美術館に行けなかったので、このような取り組みはありがたい」「夕方に開いていると助かる。解説もあったので作品を深く理解できた」などの声が寄せられています。

今年度最後の3月は「入門・岡山の美術」の6回目、岡山ゆかりの洋画作品について学芸員が解説します。

来年度も今年度と同様、午後6時から約1時間の予定で行いますが、午後5時でいったん閉館することなく、7時まで閉館しますので、ご利用いただきやすくなります。社会人と銘打っていますが、主婦や学生など少しでも美術に興味を持っている人などなたでも気軽に参加できます。聴講の事前申し込みは不要ですが、各展示会の入館料が必要です。多くの皆様の参加をお待ちしています。

(副館長 渡辺道夫)

*お問い合わせは、県立美術館まで(086-225-4800)



社会人のための美術の夕べ「棟方志功と芹沢銈介をみる」

美術館講座

平成18年度の教育普及事業をふりかえる

平成18年度は、13回の美術館講座が行われました。講師は、当館館長、副館長、学芸員に加え、外部ゲストをお招きしました。その内容は、岡山の文化に関わる研究発表や、各企画・特別展をより詳しく紹介するためのレクチャーです。

ゲストによる講座は、「国吉康雄、境界を生きて」(4月23日、講師：市川政憲氏)や、講座後半に対話型ギャラリートークが展開された「アートで話そう」(7月29日、講師：林寿美氏)、そして座談会形式の「玉堂を語る」(10月1日、小林忠氏、佐藤康宏氏、守安収)のように、特別展の関連事業として催され好評を博しました。講師が当館員の場合は、各自が担当する特別展を解説するもの、あるいは日々の研究の成果を発表する内容となります。

新年度はこれまでのパターンに加え、外部ゲストと当学芸員が当館収蔵品の魅力について話を深めるもの、また一年を通じたシリーズ講座等を開催したいと考えています。当美術館講座が、岡山の美術や様々な

芸術について、新たな魅力を発見・発信する場となるような新たな企画を用意していく予定です。開館20周年を迎える年の美術館講座をお楽しみに。

(学芸員 山吹知子)



座談会「玉堂を語る」開催風景

「新春特別展示 棟方志功と芹沢銈介」をふりかえって

展示会後記



建物入口



会場風景

開館日数21日にして来館者数7,800人という期待を上回る反響に、両作家の人気ぶり、特に岡山でのファンの方の多さを実感いたしました。

本展示会は、昨年県内の一所蔵家より棟方志功と芹沢銈介の作品が当館へ寄託されたことを記念して企画したものです。寄託作品に加えて全国各地から両者の代表作を拝借しておよそ70点で構成し、会場前半では各作家の作品世界を紹介し、後半では共通モチーフをもって制作された二人の作品を並列して、両者の競演を試みました。棟方志功、芹沢銈介それぞれのダイナミズムとともに、両作家の作品を並べて観る楽しさを味わってもらえたのではないのでしょうか。

今回はデザイナー野村勝久氏を起用して広報活動を展開し、会場の雰囲気作りも二人三脚で行いました。ポスター、チラシを目にした人にワクワクしてもらいたい、そして来館者に満足してもらいたい、そんな思いを一杯込めて準備を進めました。より多くの人に、私たちの願いが届いたことを願っています。

(学芸員 山吹知子)

常設展のここに注目!

鑑賞をより深めてもらうために

展示されている作品の情報を示すものに、我々学芸員がキャプションと呼んでいる解説ラベルがあります。キャプションには、作品の名称、作家名、制作年、素材、技法、法量(寸法)といった、鑑賞者に対して伝達すべき事柄が記載されています。また、展示構成を担当した学芸員が、展示にこめたテーマを解説したパネルもあります。これらのキャプションには、鑑賞をより深めてもらうための役割がこめられています。

キャプションに関して鑑賞者から寄せられる意見は、総じて以下の2点に集約されるでしょう。「もっと詳しい解説を」と「詳しいすぎる解説は、作品そのものに対する注意をそらすのでは?」というものです。もちろんキャプションを読むことだけに目を奪われるのも考えものです。実物が目の前にあるのですから、何はともあれ作品をじっくり鑑賞してください。キャプションを見るのはそれからでも遅くはありません。皆さんが作品を見たときに感じた自由な印象や感想を大切にして欲しいものです。そのあとでキャプションを見ることで、さらに作品についての理解を深めてほしいと思っています。

当館の常設展や特別展で使用するキャプションは、そのほとんどが学芸員の手作りです。

記載する内容の正確さはもちろんのこと、活字の種類や大きさ、文字量、地色の配色など、見やすさと読みやすさに配慮しています。

名脇役であるキャプションを上手く活用することで、皆さんの鑑賞がより深まってくれば、展示替えにあわせて大量のキャプションをカットする私の苦勞も報われるというものです。

(学芸員 齋藤武郎)



東海道五十三次大正漫画絵巻を中心とした(平成19年1月30日~3月11日開催)では、漫画絵巻に描かれた宿場を説明した日本地図の大型キャプションを制作し設置した。